

パネルディスカッション「米子市公会堂をどのように保存・維持していくか」

2010年12月23日 米子市公会堂シンポジウム

パネリスト・コーディネーター

- ・ 河東義之
 - 基調講演講師。プロフィールは貴重講演を参照
- ・ 兼松紘一郎
 - 建築家、(株)兼松設計主催。DOCOMOMO Japan 幹事長。日本建築家協会ならびに日本建築学会にて JIA-KIT 建築アーカイヴ運営委員等、特に建築図面の記録保存に関わる数々の委員や DOCOMOMO Japan(近代建築の記録調査および保存のための国際組織 DOCOMOMO の日本支部)の幹事長などを歴任することを通じて、建築のあり方を考え、建築の保存に関わりながら建築文化を社会に伝えることに尽力。
- ・ 野田邦弘
 - 鳥取大学地域学部地域文化科教授。昭和 53 年に横浜市に入庁し、文化行政を主に担当する。横浜トリエンナーレ等も担当。平成 17 年より現職。文科経済会理事、日本文化政策学理事、鳥取県自治研センター理事、あいちトリエンナーレ 2010 実行委員などの数々の役職も歴任。
- ・ 小谷幸久
 - 米子市公会堂の存続と早期改修を求める市民会議代表世話人。鳥取県吹奏楽連盟顧問。
- ・ 熊谷昌彦(コーディネーター)
 - 米子工業高等専門学校建築学科教授。専門の建築計画、都市計画の研究のかたわら、日本建築学会中国支部常議員、日本都市計画学会中国四国支部幹事、NPO 法人中海再生プロジェクト将来構想委員など主にまちづくりに関する社会活動多数。

パネルディスカッションの概要

兼松(敬称略、以下同じ)

私は DOCOMOMO Japan 幹事長、建築学会の委員会など、建築保存活動にずっと関わっている。公会堂を見たとき「村野さんだなあ」とつくづく思った。やさしい建築、人の心を包むようだ。ホールの音楽や演劇と観客が一体化する様子が思い浮かんだ。村野藤吾は人に優しい建築を作るために、仕事には厳しい建築家だった。己にも、スタッフ、建築工事の技術者、材料を作る職人にも厳しかったが、今日はそんな話も伝えたい。

野田

横浜市でみなとみらいの都市計画、音楽・演劇の企画をしてきた。2005年から鳥取大学で新設した地域学部（以前の教育学部）で研究しているが、鳥取も米子も倉吉も衰退している。産業・経済の視点での活性化には、「地域の歴史・文化・魅力」という大きなことを考えてこなかったのではないか。文化や芸術を活かした地域づくりが研究テーマである。

米子市公会堂は1200席のコンパクトな良いホール。機能面が良く、ロケーションも良い。米子のど真ん中が、万一取り壊して駐車場にでもしたらと思うとぞっとする。

小谷

公会堂の充実の会、市民会議の代表世話人である。地元の音楽関係者として、中・高・大学一般、すべて公会堂に育ててもらった。公会堂は52年間、米子、鳥取の文化を支えてきた。文化に無くてはならない。公会堂が三度目のリニューアルをされて使えるものになったらよいと願っている。

河東

昨日初めて公会堂を見た。村野さんらしいある種のつやっぽさを感じる。村野さんの建築はやさしく、やわらかさ、つやっぽさが見られる。ホールは普通に作るとゴツくなる。公会堂も正面から見るとゴツいけど、その中に、連続した曲線を用いたカーブがある。タイル張りの壁面、壁面の縁取りの細さ、壁面のゆるやかなカーブ、あれを見るとゴツさが吹っ飛ぶ。こういう建築は、そうざらにはない。村野さんの代表作と思って良いと思う。米子の人も、そういう目でもう一度見てもらえると、良さが分かるのではないか。手すりのカーブ、ドアの取手なども見て欲しい。

小谷

ここまでの経緯を説明する。

2006年、突如「米子市公会堂維持か閉鎖か」と新聞報道された。大慌てで文化団体が充実の会を結成し、主に市との話し合いを行なった。2007年12月に「年度内に耐震調査費を組む」と市長が約束したが、翌年3月に予算計上されなかった。2008年11月、再び市長が耐震調査を明言し、2009年6月補正予算までに約1,250万円の調査費が計上され、8月に業者選定・2010年2月に報告のスケジュールになった。この段階で私達は、西部地震でも被害が無かった公会堂の耐震強度は心配していなかった。2010年3月に耐震調査結果で「倒壊の危険」が指摘され、9月末日での使用停止が発表される。既に1年先まで160団体の予約が埋まっていたが、半分以上はイベントを中止。残りは他のホールに変わった。

2010年6月に市民会議を立ち上げて陳情署名活動を展開し、49,469名の署名を集めた。この陳情は7月と9月議会に継続審議となった。米子市長の種々の発言は廃止ありきに感

じられたが、2010年10月半ばに定例記者会見で「もう一度原点に戻って検討する」と表明し、市民アンケートなどが採られた。2010年11月25日、米子市長が「公会堂は改修保存をしたい」と表明。現在は12月議会の開催中で、市長の表明に質問が集中している。経済教育委員会ではまた継続審議との結論。明日の議会最終日に報告され審議される。

野田

歴史的建築物の「活用」を通して、まちづくりの機運をどう高めていくかを研究している。その事例として、横浜赤レンガ倉庫を紹介する。当初、横浜市は取り壊すつもりだった。保存して活用した結果、今では横浜の顔となる文化施設・商業施設として多く人が集まっている。

横浜ではみなとみらい21の発展の一方、旧市街地である関内地区はオフィスが空き、衰退が見られた。そこで、旧横浜銀行、郵船ビルなど近代建築をアトリエ・オフィス・スタジオの「場」としてアーティストを集めた。これが成功し、現在では地域に100人以上のアーティストが集まっている。経済効果は3年間で120億円といわれている。

鳥取県では、倉吉の打吹地区でのフィールドワークを行っている。人口が減少している地区である。歴史的建造物を使った「場」の創造にこだわり、倉吉のまちあるき、フィールドワーク報告会、廃業されたお店を休日のレトロ博物館に変える、造り酒屋でのコンサートなど行なった。倉吉の建築の一つに円形校舎の旧明倫小学校があるが、解体の危機にある。保存活動によって解体が延期されているが、基本方針が定まっていない。保存運動の過程でNPO法人明倫NEXT100が立ち上がった。明倫AIR・メイリントーン(2010)という企画では、アーティストに一定期間暮らしてもらって、地域住民と対話しながら作品を作ったりした。作ることが目的ではなく、作るプロセスを通して地域が活性化することが目的である。

鳥取市では五臓園ビルが文化財指定され、その「場」を使って、若い人も一緒にイベント作りしている。

まちづくりに歴史的建築の価値を活かすとき、現在の日本の地方では、高齢者と若者のコミュニケーションの問題が生じる。歴史建築にかかわりが深いのは高齢者だが、まちづくりにパワーを与えるのは若者。しかし若者の多くは外に流出しており、地元の若者も高齢者とのコミュニケーションが少ない。

米子市公会堂とは、単なる建築物ではない。市民の50年にわたる文化活動が蓄積している場である。将来にわたって、市民文化を創造する拠点として活用し、発展できる場である。21世紀は知識基盤社会になり、そこでは知的財産の生産と活用が重要となる。文化拠点が数多く存在する都市が競争力を持つようになるので、米子市はそれを目指して欲しい。

人口当たりの文化施設数ではなく、文化施設が活用されているかどうかで評価すべきである。創造の場として米子市公会堂をどう活かすのか、それを考えることが課題である。

兼松

米子市公会堂の存続・活用に向けて、それを支えるシステムを考える。

まずは DOCOMOMO Japan を紹介する。「MOMO」とは「Modern Movement = 近代化の運動で立てられた建築」である。「DOCOMOMO」は近代建築の記録調査および保存のための国際組織で、世界 50 カ国以上に広がっている。

日本では大正から昭和にかけての建築が対象になる。DOCOMOMO Japan が選定した優れた近代建築は 150 棟（2009 年現在）で、その選定基準は世界の DOCOMOMO の選定基準に準じた。すなわち、装飾を用いるのではなく線や面のデザインで構成されている、

新技術の成果がデザインに反映されている、社会改革思想が見られる、環境形成・周辺の街並みや環境にも配慮されている、そんな名建築を選定した。

建築家や地域が極端には偏らないよう、村野藤吾の建築は 5 棟に絞った。村野さんは仕事について非常に厳しい人だった。日生劇場を建築する際の逸話を紹介する。スタッフがデザインの模型作ると、村野さんは大勢のスタッフやメーカーの社員を静かに回りに立たせたまま、20～30 分間何も言わずにじっと模型を見つめ続けた。そして村野さんがヘラでぐっと模型をつぶすと、周りのスタッフは「ああ、またダメだった」とガッカリする、その繰返しだったそうだ。村野さんは、人が使う建築のために建築家は何をしなければならないのか、非常に厳しく問い続けた。おそらく米子市公会堂も同じように建築されたのだろう。そんな村野藤吾の建築のある喜びを共有したい。

米子市公会堂の保存に参考になりそうな事例のひとつが、「群馬音楽センター」である。群馬の高崎市の音楽ホールで市民の寄付によって建築された。群馬交響楽団が育ったホールでもあり、高崎市民の原風景といえる。保存運動が実ったが、その背景には市民の愛着がある。

別の事例として、東京の「国際文化会館」を紹介する。戦後、国際交流を活発化するため、板倉準三・前川國男・吉村順三らが関わって建築された。一時は建て替えが検討され、理事会で建て替え決議が承認され、理事長も建て替えを表明する状態だった。しかし、建築学会によるシンポジウムはじめ保存運動が実り、保存された。改修案を提案するために、建築学会では「保存計画特別委員会」が組織された。さらに、国際文化会館側も、文化価値を維持する改修が行われるように専門家を含む「実施設計・施工監修委員会」を組織した。文化価値を維持するために何が大切かの判断基準が問題となったため、建築学会の委員会が「建造物の評価と保存活用ガイドライン」を策定した。

また別の事例として、現在進行中の地方の某庁舎の保存改修の事例を紹介する。50年前に著名な建築家の設計によって建てられたもので、市長は残したいと意思表示している。耐震補強が必要だが、耐震壁があちこちに入ると建築価値が損なわれるという問題が発生する。それを判断するためには、村野さんが最初に大切にしていたのは何かを検討する必要がある。まずシンポジウムでどこが大切かを議論し、その後で建築家・識者による専門家委員会を組織して検討を重ねた。専門家委員会では、同時に、耐震診断の見直しも検討した。その結果、当初想定されていた大掛かりな耐震補強までは必要ないのでは、という方向が見えてきている。

建築の保存活用の設計と改修工事は、現在とこれからの時代の「創造行為」である。建築の価値（オーセンティシティ・当初設計した建築家の目指したもの）を保ちながら、次代を見据えて新技術にトライしたり、必要な機能を加えたりして、新しい価値の発見・構築・創造につなげる。

米子市公会堂の保存活用と改修工事をなすためのシステムとして、「諮問委員会の設置」を提言する。市当局による、この建築の保存改修を検討する諮問委員会の設置が望ましい。

検討すべき点の一つは、耐震診断の見直しである。耐震診断のIS値は低すぎるのではないかと？鳥取西部地震は、震度5の耐震試験と同じことになる。それで被害が小さかったのに、このように低い数字が出たのは何なのか、検証が必要である。公会堂のような特殊な形状の耐震は、通常のマニュアルによる耐震診断では対応できない。実績のある構造研究者（構造設計家）による再検証が望まれる。

検討すべきもう一点は、この建築の価値を検証することである。現在と次代とを見据えた機能や設備を設計するためには、同時に、この建築の価値を検証して見極める必要がある。それができるメンバー構成をすることが必須となる。

河東

耐震診断の検証は学術的に行なう必要がある。残すつもりの耐震診断と、そうではない耐震診断とは、結果が微妙に...しばしば大幅に違うことがある。保存の方向ならば、それを前提にやり直す必要がある。

さらに大切なこととして、公会堂の価値を市民に知ってもらおう努力をする必要がある。

これからすることには、「まちづくりの視点」が非常に重要になる。いずれにしても、文化遺産を将来に残すことには、エネルギー（お金を含む）が必要である。今までと同じ公会堂を使い続けても意味が無い。公会堂の位置づけとか賑わいの位置づけとか、公会堂を中心にあの地域をどうするかを見直し、今までと違ったそれ以上の使い方を考える。私自身は10億でも15億でも高いとは思わないが、新生公会堂にしないと、特に政治家の方に説得性を持たないだろう。改修をきっかけに新しい公会堂が始まるいい機会なので。その

アイデアを出さないといけない。

野田

従来、公立ホールはお役所的な部分があって評判が悪い。しかし新しいホールには成功事例もある。例えば可児市の市民ホールは、館長以下スタッフが努力・工夫し、市民の多くが通うようなホールになっている。見習うべき点がある。

新生・公会堂に高い目標を設定した方が良いだろう。課題として、文化団体は高齢化が進みがちになる。しかし新生・公会堂は若い人が足を運ぶホールにならないと、説得力がないだろう。

兼松

耐震診断見直しの必要性について補足したい。私自身は、建築構造は専門外なので、米子市の HP に掲載されている報告書を構造が専門の大学教授に見てもらい、「いくつか疑問があるので、もう一度検証した方が良い」との判断を確認した。

米子市当局としては、正しく手続きを踏み審査も経た調査結果なので、見直しにくい事情はあるだろう。前回の調査結果は、それによって耐震問題が明確になったという点を評価して良いと考える。そして次のステップに進むために、新しい技術も熟知した人材に相談する必要がある。

米子市の報告書について問題を 1 ヶ所指摘する。報告書には、大蔵省による主な耐用年数 50 年などの数字が掲載されている（11 ページ）。このような報告で、「今改修しても十何年しか使えない」という「錯覚」が生まれることが怖い。建築物は適切にメンテナンスすればずっと使い続けられる。メンテナンスしないと問題が生じる。それはどの建物でも同じである。それも含めて、耐震診断について違った視点での検証がいると思う。

会場からの質問

改修によって文化的価値が薄れないだろうか？

河東

価値を落とさない改修は可能である。それができる人に頼めばできる。できない人に頼むな、ということ。

兼松

建築は使うためにあるので、今の時代に合う機能・改修も必要だ。場合によっては増築だって必要。村野藤吾の目指したものを受け止めながらも、今の時代に合う機能を付加することが必要。それを誰が判断するかが難しい。

熊谷

最後に一言ずつ、公会堂存続を目指す市民へのメッセージをいただきたい。

小谷

公会堂が 52 年間の文化を創ってくれた。我々はそれを受け継ぐ。存続運動をした責任を持って、リニューアルしたものをよりよく使い続けなければならないと考えている。

野田

かつて公会堂の建築には市民の寄付が財源となった。これからは行政に頼るでは何も進まない時代である。米子市民の心意気として、「行政をお願いします」ではなく、自分達がやることを見せて欲しい。それによって行政も変わるだろう。

兼松

公会堂は米子市民にとっての宝物である。建築保存運動は、普通は「建て替えたい」と「残したい」との選択になる場合が多い。米子市公会堂はそうではなく、純粋に「なんとか残したい」という運動。保存されるのが当然の理である。これを残せないようなら駄目、公会堂だけではなくて日本が駄目になるのではないかと思う。できる限りの支援をするので、行政と一緒に残して欲しい。

河東

米子市公会堂は「米子だからこそ残った、新しい意味を持った」という結果にならないといけない。現在の残すか壊すかの議論は、上手くいけば意味がある議論になる。この議論を通じて、公会堂の新しい意義が生まれてくる。今は残すための苦しみと捉えて頑張ってく欲しい。

繰り返しになるが、文化遺産を残すためにはエネルギーもお金も必要。別の事例で 25 億円の改修費が必要になったとき、改修現場に来た議員から「なんで補修にこんなにかかる」と文句を言われた。その回答は「新しいものは 100 億円かけても建てられない」というもの。村野藤吾はもういないので、米子市民が作った公会堂は失うと取戻しがきかない。三菱一号館のように再建の話にはならないだろう。ぜひ頑張ってください。

熊谷

今回のパネルディスカッションを通じ、米子市民の原点を考えさせられた。米子の自由の気風を活かしたい。米子市公会堂の未来を考えると、私たち自身を考えることになると分かった。